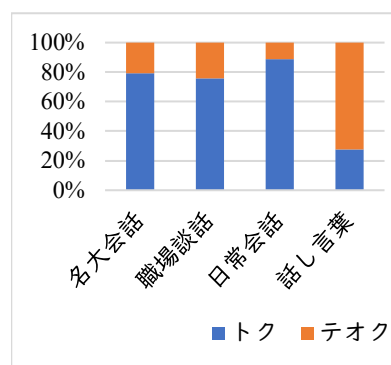


要旨 本研究では、Shibatani (2007) の「意味的に異質なコンテキストが文法化を促進する」という観点から V テオク(トク)形式(以下、テオク)を見直すことにより、テオクを「ものや人がある位置に存在させてそのままの状態にする」(『明鏡国語辞典』より)というオクの語義を色濃く残す A タイプ(入れておく)と、オクの文法化が進んだ当為的 (deontic) モダリティ形式¹としての B タイプ(決めておく)とに大別する。Aタイプは前項動詞が位置変化と意味的に近いものに限られ、連続体でひとまとまりのイベントを表し、語彙化²を起こしていると思われる(取っておく、伏せておく)のに対し、Bタイプは、位置変化とは異質な意味を持つ多様な動詞(電話する、チェックする)に接続し生産性が高い。

1. はじめに

調査した用例は、国立国語研究所が提供する『中納言』で調査できる口語コーパスのうち、『現日研・職場談話コーパス』『名大会話コーパス』『日本語日常会話コーパス:モニター公開版』から抽出³した 1270 件である。これまでの研究が、書き言葉中心であったことから、談話だけに対象を絞った。図 1 に見られるように縮約形式トク(ドク)が談話で定着していることは、文法化や語彙化が進んでいる表れと見られる。口語コーパスのうち、唯一テオクの頻度が高かった『日本語話し言葉コーパス』は、9割が模擬講演等のモノローグであり、他の談話コーパスとは性質が異なるため、調査対象から外した。



(図1) テオクの出現形

(表1) 口語コーパスにおけるテオクの出現形

	名大	職場	日常	話し言葉
トク/ドク	508	134	403	610
テオク/デオク	132	43	50	1586
総件数	640	177	453	2196
トク・ドク/総件数	79.4%	75.7%	89.0%	27.8%

2. 分類の根拠

2.1. テオクが義務的な A タイプと義務的でない B タイプ

テオクについては、高橋 (1969) 吉川 (1973) 以来、「準備・放置・処置」等の意味分類の細分化や「アスペクト vs モダリティ」の議論が続いてきた。影山 (1993) 以降、盛んに研究されている複合動詞とは異なり、テ形接続の連続体の後項動詞は一律に文法的であるとみなされる傾向がある。しかしながら、植田 (2017) の指摘にもあるようにテオクの使用

¹ 義務・必要・許可(禁止・不必要)を表すモダリティ形式を、当為的 (deontic) モダリティ形式と呼ぶ。

² 語彙化を、①ある意味要素と特定の形態素との体系的な共時的結びつきが定着すること ②語がそこに含まれる要素からは予測不可能な特別な意味を持つこと、の二つの意味で使用する。(古賀 2015 参照)

³ 抽出方法は、短単位(キー:品詞大分類{動詞/助動詞}、後方共起キーから一語目:語彙素読みトク)、(キー:品詞大分類{動詞/助動詞}、後方共起一語目:書字形出現形{て/で}、後方共起二語目:語彙素読みオク)

が義務的な場合とそうでない場合があり、意味的に見ても均一とは言い難い。テオク文の用例からテオクを抜いた場合の適格性や意味の違いを見られたい。

- (1) (食卓)「お煎餅{置いといたの/?置いたの}見た?」「うん。」『日常』T004_001.5430.3090
- (2) (食卓)「牛乳飲み終わったらちょっと{取っといて/*取って}くれる?パック。」『日常』C001_007.2120.1070
- (3) (友人との雑談)「血の塊とゆうか、えーっと、しこりみたいなのが中にできちゃってるけど、(中略)でね、まあ、
{ほっといて/*ほって}大丈夫ですって言ってきて」『日常』C001_001.9460.5460
- (4) (懇談会)「次の集まりを大体日程{決めといた/決めた}ほうがいいですよ。」『日常』T004_013.152850.86540
- (5) (会議で)「はい、じゃ、{注文しといて-/注文して-},車で取りに行く。」⁴『職場』M04K011.15980.9720
- (6) (年賀状の処分方法を聞き)「じゃあ、余分に{買っといて/買って}もいいわけか。」『名大』data083.62700.40300

本発表では、テオクを取り除いた場合に不適格(または意味が変わる)や不自然になる(1)(2)(3)を、Aタイプとする。位置変化と関係する前項動詞に「そのままにする」というオクの語義を色濃く残した意味を添え、V テオク全体でひとつのイベントを表す。(3)は、物理的な位置変化の意味から多義化し、「かまわない・干渉しない」という不透明な意味を持つ語彙になったものである。一方、テオクを取り除いても表すイベントの意味自体が変化しない(4)(5)(6)を、文法化が進んだBタイプとし、Aタイプから区別する。テオクが無い場合と比較すると、「すべきである」「する必要がある」という意味が伝わり、「Vしない(いけない)」「Vばいい」「Vた方がいい」「Vてもいい」のようなソフトな当為的モダリティ形式のひとつとして使用されていると考える。

2.2. 意味的な違い

近年のテオクに関する統一的説明が試みられているが、統一的な説明は、例えば、「後の時点における効力の発現を見越してその行為を行う」(菊地 2009)のように、本発表で言うBタイプでテオクを包括する傾向にある。どちらのタイプとも矛盾しない抽象化を目指す一方で、こうした包括的な説明にも当てはまらないAタイプの存在が無視されているように思われる。その理由として、文脈によってはAタイプでも「準備」や「処置」の意味があると解釈されてきたことが挙げられる。例えば、本発表でAタイプとする「置いとく」「取っとく」も(1)(2)のような文脈では「準備」とされ得るが、これは文脈によるものとするのが妥当である。「置いとく」も(7)のような場合は「準備」とは解釈されず、(3)と同様に「放置」に分類されるということが起こる。逆に、(8)のような「入れとく」も「冷やすために」という文脈があれば、「放置」ではなく「準備」とされてきた。

- (7) (家族の会話)「お骨があったらね、いつまでもそんなにうち置いといちゃいけないからって、京橋のおばさんという人が……」『名大』data129.47190.32030
- (8) (食事を勧めて)「冷蔵庫入れとくとさ味変わるからやなんだ。今食べてほしい。」『日常』T015_010.12280.7110

このように、紛らわしい実態があることは確かであるが、AタイプとBタイプでは、意味的に異なると思える現象がある。Aタイプは(7)(8)のようにその行為の結果が否定的な場合にも使用されるが、Bタイプでは不自然になる。「?決めとくといけない」「?電話しといちゃだめです」等の否定的結果との組み合わせは疑問文にでもしない限り不自然になる。これは、Bタイプの場合、その行為Vを実行することが「望ましい」という意味が形式に含まれているためと考えら

⁴ 「スル動詞」としてまとめた場合は頻度も高い。これについては2.3.で詳述する。

れる。金水(2004)は、テ形助動詞の形式全般に関して、「個々の文脈を取り込んで、推論を導出し、その結果に対して、動作主や話し手が『望ましい』『望ましくない』などと評価を与えるようなシステムである」という枠組みを示しているが、その観点からみると、テミルは「結果が望ましいか望ましくないかが行為の実行前にわからない」ことを表すのに対して、テオクの B タイプは「結果が望ましいことが予測されるためその行為を行う」ことを表すと言える。A タイプのように位置変化の意味であれば、テオクを含んだ行為が文脈次第で肯定的にも否定的にもなるのは異なる。

紛らわしさにも理由があると考えられる。菊田(2008)は、テオクの文法化について「対象物を意図的に『置く』、ということから、なんらかの目的をもって行われるという『ニュアンス』が生まれ、対象物を物理的にどこかに置かなくても、将来なんらかの目的のために何かを行うという意味を表すようになった」と説明している。文脈上得られる語用論的な推論が次第にテオクの文法的な意味になっていったとすれば、空間的な意味を残す A タイプでは、文脈によってその解釈が左右されるのも自然なことであると言える。

2.3. 生産性の違い

表 2 は、前項動詞の頻度上位 10 位である⁵。異なり語数 284 件中の 3.5%である上位 10 位がのべ総数 1270 件の 47.3%、20 位までで 59.7% を占める。しかしながら、特定の動詞に接続する頻度が高いからといって、テオク全体の生産性が低いというわけではない。A タイプの前項動詞は、位置変化と親和性の高いものに限られ生産的ではない一方、B タイプは多様な前項動詞と結びつき、新規の組み合わせの創出という意味で生産性が高い。青木(2013)は、古代語の複合動詞の分類についての論文で同様の区別を提案しているが、この区別は現代語の複合動詞にも、テオクにも有効であると考えられる。

Bauer(2001)では、形態素の生産性を測る絶対的な計算方法はないとしながらも、「あるコーパス内での 1 回語」が生産性を測る指標として注目されていることを紹介している。1 回語は、異なり語のそれぞれの頻度は低くてもさまざまな形態素に接続して使用されることを示すと考えられるからである。日本語では、動詞に接続する形態素の生産性に関して、スル動詞との共起がひとつの目安となる。様々な漢語動名詞、形容詞だけでなく、新規の外來語やオノマトペにつき、スル動詞自体の生産性が高いからである。今回の調査では、スル動詞はのべ総数は 202 件、異なり語数は 116 件で、総異なり語数 284 件の 4割を占めた。それぞれの頻度は高くなく、うち 100 件は一度か二度しか現れない。「ご紹介する」「スクショする」「シュツシュする」「はつきりする」「形容詞類+する」(小さくする、静かにする)等、多種多様なスル動詞に接続し、生産性の高さを示している。

3. 分類

3.1. ひとまとまりのイベントを表す語彙としてのテオク(Aタイプ)

本発表では、すべてのテオクが文法化の進んだ補助動詞であるとは考えない。これまでの研究では、テ形接続であるという理由で連用接続の複合動詞とは別物として扱われてきた。しかしながら、2.3. の生産性で見たように、実際に用例収集をし、分析をすると、複合動詞と平行する現象が見える。

(表 2) 前項動詞別頻度(1~10 位)と総数(のべ 1270 件)に占める割合

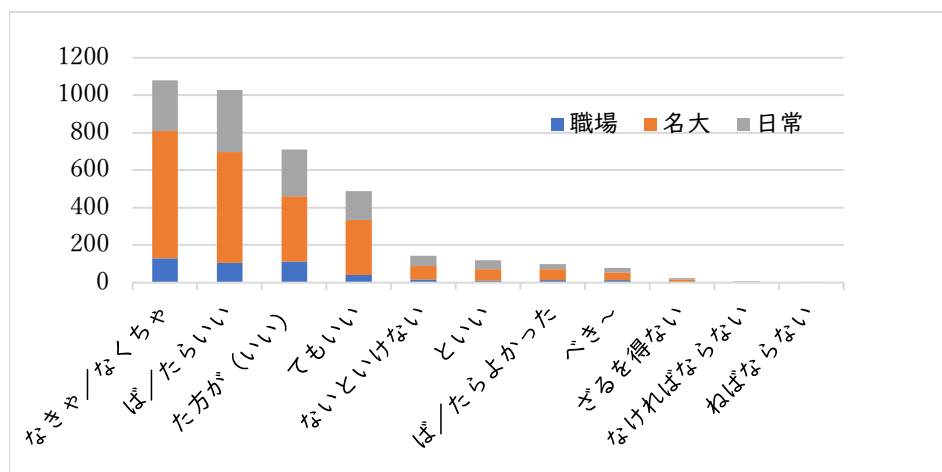
位	前項動詞	のべ	割合
1	置く	134	10.6%
2	言う	91	7.2%
3	入れる	80	6.3%
4	取る	68	5.4%
5	書く	59	4.6%
6	ほうる	44	3.5%
7	やる	42	3.3%
8	名詞+にする	35	2.8%
9	作る	26	2.0%
10	付ける	22	1.7%

⁵ 8 位だけは「名詞+にする」であるが、これは抽出段階では 202 件あった「する」を「用意する」「アピールする」等に細分化する過程で、構文として残したものである。選択肢を名詞としてとり、「~に決める」という意味を持つ構文である(例:12時半にしておく)。

現代語では連用接続自体が閉じた語彙の中にあり、一部の統語的と呼ばれるもの以外は、新しい接続を生み出すのが難しくなっている。V オクという形式が古語にはあったが、「書きおき」「取りおき」「作りおき」「据えおき」等、名詞形でも頻度が高いものが一部動詞としても使用される以外は現代語では見られない。一方、古語の V オクによる語彙は、『日本国語大辞典』に見出し語として掲載のものだけで 44 件ある(例: 入れおく、隠しおく、立ておく、捨ておく)。多くの連用接続の動詞連続体が語彙として残るなか、V オクに関しては、V イク・V クルと同様に⁶、ほぼすべてがテ形接続に移行したとみられる。位置変化と関係する V ツケル、V アゲル、V コム(例: 縫いつける、吸い上げる、放り込む)等の形式が語彙的な複合動詞として現在も使用されているのとは対照的である。永澤(2016)の『太陽コーパス』の調査によれば、近代に入り書き言葉においてもVオクの形式の使用が激減した。Vオク形式が衰退した現代日本語において、その役割の一部をVテオクが担うようになったとしても不思議ではないだろう。

3.2. 当為的(deontic)モダリティとしてのVテオク(Bタイプ)

現代日本語においては複合的な当為的モダリティ形式が既に数多く存在する。口語コーパスにおける使用実態を、ざっと調査してみた。一般的に当為的モダリティ形式として認められている「V{ねば/なければ}{ならない/いけない}」は『日常』『名大』『職場』では数件しかなく、少ないことが予想される「V ざるを得ない」を下回った。「V べき〜」も思いの外少ない。その一方で、「V{なきゃ/なくちゃ/ないと}{いけない/ならない}」等の形式がどの談話コーパスにおいても高く、「V た方がいい」「V といい」「V{ば/たら}いい/よかった」も目立つ。許可の形式「V てもいい」も、談話では遠慮がちな助言や指示として使用されていることが多い(図2)。



(図2) 口語コーパスにおける当為モダリティ形式の使用状況

このような傾向が見られる理由として、形式が使用される場面での発話行為上の要請があるだろう。当為的モダリティ形式は、動作主が二人称の場合は指示・禁止・依頼・助言等の談話機能を持つ。このような場面では、柔らかく丁寧な表現形式が求められるため、新しいバリエーションが常に生まれる可能性がある。

興味深いことに、(4) (6)のように、テオクと他の当為的モダリティ形式が共起する頻度が高い。「V とけば/ときゃ(いい)」「V といた方がいい」「V とかななくちゃ/なきゃ」や、タ形でも「V といてよかった」や、逆に、過去の行わなかった行為の当為性について反事実的に述べる「V{とけば/ときゃ}よかった」も構文として定着している。このような当為的表現と接続した形でのテオクの共起は、『職場』『日常』で 3 割、『名大』で 2 割を占める。テオクは、他の当為的

⁶ V テイク・V テクルについても同様のことが Shibatani & Chung (2007) で指摘されている。

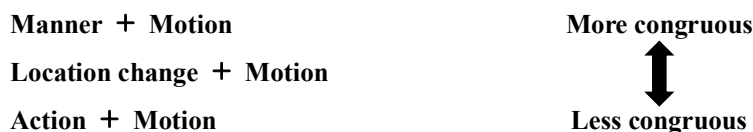
形式と非常に相性がいいのである。この解釈には二通りがあり得る。一つは、他の表現で当為の意味が既に表されているのだから、テオクそのものには当為的モダリティはないとする考え方である。もうひとつは、多くの共起表現は、類似の意味の形態素や語句が集まる現象であることから、テオクにも当為的な意味があってもよいという考え方である。

言語の経済性は主として話し手としての言語使用者の便に沿ったものであり、逆に、多くの共起表現は聞き手側の解釈しやすさに沿うものである。金谷(2018)では、ラシイが近年口語では伝聞用法にほぼ傾いていることをシナリオ調査で見たが、「～{とっていた/って言う/とされている/という噂(話)がある}ラシイ」のように、他の伝聞引用形式とラシイの共起例が見つかる。文の構造は[[～とっていた]ラシイ]ではあるが、ラシイは「推量」ではなく、ラシイ文全体が外部の情報源を持つことを伝達する。ラシイがなくても伝聞であることがわかり、ラシイだけでも伝聞であることが伝わるのにも拘わらず共起するのである。また、このような類似の意味の形態素や語句が集まる現象によって、語用論的強化⁷が起り、新しい意味が定着したとも考えられる。他の当為表現とテオクとの共起頻度が高いことが、Bタイプが当為モダリティであることを否定するものではないというのが本発表の立場である。

また、高橋(1969)は、「もくろみ用法(モダリティ用法)」においても「あるときまでに動作をおわるといふ、すがた動詞のなごりを持っている点は、『しておく』の『しておく』らしいところである」と述べた。これは、(5')「はい、じゃ、{注文しといて/注文して。}」のような場合に、テオク文の方が時間に猶予があるように聞こえることを指している。テオクをアスペクト用法として論じる根拠のひとつにもなっているようである。しかしながら、テオクは今すぐのことにも(4)、少し先のことにも(6)、いついつまでという期限付きのことにも使用できるため、テオクに期限をつけるような機能があるとは言えないだろう。(5')における対立は、「注文する」という動作動詞が本来持つアスペクトである将然性によって生じる対立であると考えられる。Bタイプの場合、テオクが接続することによって、むしろ、本来Vが持っている将然性というアスペクトから解放されると言える。

4. 動詞連続体と文法化 Shibatani (2007)

では、どのようにこのような意味機能に違いが生まれるのだろうか。Shibatani (2007)は、V テクル/テイクを例に、「Grammaticalization is facilitated in semantically less congruous environment (意味的に異質なコンテキストが文法化を促進する)」を主張した。この仮説は、動詞連続体に限らず、広く文法化現象に、また、多義化全般にも当てはまると考えられる。さらに、通時的な文法化の過程の説明のみならず、共時的に文法化のレベルが異なるものが共存する現象も説明することができる。



(図3) Shibatani (2007)

“congruous”とは、動詞連続体においては、前後の動詞の意味する内容が同一イベント内に組み込まれやすいことを意味する。Shibatani (2007)は、①「歩いてくる」は「Manner + Motion」②「出てくる」は「Location change + Motion」③「飲んでくる」は「Action + Motion」という具合に、前後の動詞の意味的な組み合わせの性質によってテクルの文法化の度合いが変わってくることを示した。寺村(1984)の前後動詞の関係が並列か従属かによる分類に限

⁷ 文脈内で初めは必然的ではなかった結びつきが慣習化され、文法機能を担うことを語用論的強化(pragmatic strengthening)という。強調のための形式が、他の文法要素と結びつくことによって、やがて義務性や拘束性を持つことは広く見られる。語用論的強化はまた、モダリティや条件文といった、推論との結びつきの強い構文の発達を論じる上で有効な概念である。」大堀(2002)p.195.

界があることを指摘し、移動動詞の終着点を表す場所格が取れるかどうかや、否定のスコープの違い(例:「誰もご飯を食べてこなかった」では、広い否定のスコープが不可能)から、寺村(1984)とは異なり、③「飲んでくる」が最も文法化が進んだ形態であるとしている。①のような様態と移動の組み合わせや、②のような場所変化と移動の組み合わせであれば、単独の動詞で表す言語も存在しているが、③の「飲む」と「来る」のような異質な組み合わせは、単独の動詞で表す言語は恐らく少ない。このような前後の動詞の意味的な違いが後項動詞の文法化の程度の違いに関係しているとの主張である。

また、Shibatani(2007)では、この三つのパターンの間にも中間的なものが多く存在するとも述べており、文法化には共時的にも漸進的な側面があることにも触れている。これは、テオクにも言えることである。テオクについて、オクが本来とることのできる到着地点の場所格をとるかどうかを見てみる。(2)は動作主の管理下であるとわかるため通常言及されないが、(1)は場所格をとる。それに対して、語彙化した不透明な意味を持つ(3)や、文法化が進んだ(4)(5)(6)はとることができない。では、例えば、「書いておく」のような場合はどうか。「書く」は位置変化ではないが、行為の結果が文字として物理的に残る点で、Aタイプに近い。

(9) (会議で)「いちいち連絡するのがたいへんですよねー、みんなにね。(中略)これからあの一、特に連絡はさしあげませんがー、その黒板には書いておくことにしますので。」『職場』M06K011.3740.2340

到着地点としての場所格も取ることができ、(4)「決めておく」等に比べると、空間的な要素が強い。(10)「こんなところに暗証番号書いといちゃだめです」は言えることから、「書いて」+「オク(残す)」という一つのイベントを表すAタイプと見做した方がいいだろう。

5. まとめと今後の課題

用例を分析しながら、テオクを分類する必要性に関して確信を持つと同時に、(9)で見たような難しさがあることも認めざるを得なかった。この難しさは、また、動詞連続体である複合動詞との共通点でもある。線引きは難しいにしても、「押しだす」「書きだす」「食べだす」に文法化の段階やダスの持つ意味の異なりがあることは明らかである。Vダスを統一的に説明しようとする人がいないように、テオクもまた、より空間的な意味を持つものと、文法化がさらに進んだものに分けるのが実態に沿った記述であると思われる。

また、複雑で混沌とした動詞連続体の研究には、対照研究がヒントになる可能性がある。通言語的に、類似の語義を持つ語が文法化する際に似通った道筋をたどる場合があることがBybee(1988)でも触れられている。金吉任・ラッタナポンピョ(2017)が、「読む」「見る」「聞く」を意味するタイ語の動詞が、「V+オク」に該当する「V+ໄປ(wái)」で使用された場合に、「Vべきだ」のような当為的な意味になることを指摘しているのは興味深い。韓国語では、日本語に似た動詞連続形式「V뒤다(duda)/V놓다(nohda)」があり、ちょうど本発表のAタイプやBタイプに分類できると思われるが、これについてはまた稿を改めたい。

【参考文献】(アルファベット順)

青木博史(2013)「複合動詞の歴史的変化」影山太郎(編)『複合動詞研究の最先端:謎の解明に向けて』ひつじ書房,215-241.

Bauer, Laurie (2001) *Morphological Productivity*, Cambridge University Press.

Bybee, Joan. L. (1988). Semantic substance vs. contrast in the development of grammatical meaning. *Proceedings of the Fourteenth Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society*, 247-264.

- 藤村逸子・大曾美恵子・大島ディヴィッド義和(2011)「会話コーパスの構築によるコミュニケーション研究」藤村逸子、滝沢直宏編『言語研究の技法:データの収集と分析』ひつじ書房, 43-72.
- 現代日本語研究会(編)(2011)『合本 女性のことは・男性のことは(職場編)』
- 影山太郎(1993)『文法と語形成』ひつじ書房
- 金谷由美子(2018)「伝聞マーカーとしてのラシイ:日本語教育の視点から」『日本語・日本文化研究』28, 44-63.
- 菊田千春(2008)「複合動詞『V かかる』『V かける』の文法化:構文の成立と拡張」『同志社大学英語英文学研究』81-82(合併号), 115-165.
- 菊地康人(2009)「『ておく』の分析」『東京大学留学生センター教育研究論集』15, 1-20.
- 金吉任, ラッタナポンピョ・プラッチャヤポーン(2017)「『ておく』の指導:韓国語・タイ語母語話者のための指導案に関する考察」『阪大日本語教育学研究』第8号, 大阪大学大学院言語文化研究科・筒井佐代研究室, 27-38.
- 金水敏(2004)「文脈的結果状態に基づく日本語助動詞の意味記述」影山太郎・岸本秀樹編『日本語の分析と言語類型:柴谷方良教授還暦記念論文集』くろしお出版, 47-56.
- 古賀浩章(2015)「語彙化」『明解言語学辞典』三省堂, 78.
- 永澤斎(2016)「複合動詞『V おく』の用法とその衰退」『名古屋大学日本語・日本文化論集』24, 27-44.
- 大堀壽夫(2002)『認知言語学』東京大学出版会
- 佐藤琢三(2015)「第1章:補助動詞テオク—意味・語用論的特徴と学習者の問題」, 阿部次郎、庵功雄、佐藤琢三編『文法・談話研究と日本語教育の接点』くろしお出版, 1-18.
- Shibatani, Masayoshi (2007) Grammaticalization of converb constructions: the case of Japanese *-te* conjunctive constructions. In J. Rehbein, C. Hohenstein, L. Pietsch (eds.), *Connectivity in Grammar and Discourse* (pp.21-49). John Benjamins.
- Shibatani, Masayoshi and Chung, Sung Yeo (2007) On the Grammaticalization of Motion Verbs: A Japanese-Korean Comparative Perspective, *Japanese/Korean Linguistics*, Vol.15, 21-40.
- 高橋太郎(1969,1976)「すがたともくろみ」金田一春彦編『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房, 117-153.
- 寺村秀夫(1984)『日本語のシンタクスと意味II』くろしお出版
- 植田志穂(2017)「テオクの性質と日本語教育における提出法」『日本語・日本文化研究』27, 204-215.
- 吉川武時(1973,1976)「現代日本語動詞のアスペクト研究」金田一春彦編『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房, 155-327.

【コーパス・辞書用例】

- 小学館(2006)『精選版日本国語大辞典』
- 大修館書店(2011)『明鏡国語辞典』第2版
- 国立国語研究所 『中納言:名大会話コーパス』
『中納言:日本語日常会話コーパス:モニター公開版』
『中納言:現日研・職場談話コーパス』
『中納言:日本語話し言葉コーパス』